

[120]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1809194>

出版情報：語文研究. 120, 2015-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

高倉一紀・菱岡憲司・龍泉寺由佳 編

神道資料叢刊十四『小津久足紀行集(二)』

本書は、小津久足(号桂窓、一八〇四〜一八五八)の紀行文を紹介する『小津久足紀行集』の第二巻である。本書の構成は以下の通り。

解題

凡例

本文

班鳩日記

ぬさぶくろ日記

熊野日記

小津久足は伊勢松坂の人で、「湯浅屋」六代目、小津新蔵(与右衛門)として干鯛問屋を営んだ豪商である。彼は文化的方面においても盛んに活動しており、その文事には、紀行・詠歌・蔵書・小説受容の四つの柱が見出せる。中でも後二者に関しては、西荘文庫の主として、また曲亭馬琴の知友として著名であり、小津久足の研究もこの二つの営為に多くの関心が注がれてきた。一方、紀行・詠歌については長らく等閑

に付されてきたものの、本資料叢刊による紀行集の刊行や本書編者の一人でもある菱岡憲司氏の研究(『小津久足の歌稿について』『文献探究』第五〇号、二〇一二年三月、ほか)などもあって、近年、その重要性が認識されてきている。

久足は十四才で本居春庭に入門しており、以来国学(古学)の研鑽を重ね、また晩年にいたるまで詠歌にも精進した。しかし、久足が三十一才の時に執筆した「花鳥日記」(天保五年)を境に、彼の紀行文に見られる、古学に対する姿勢は変化する。すなわち、ここに来て、古学の門人として律してきた自主規制を廃し、古今和漢雅俗にこだわらず、自由闊達で歯に衣着せぬ物言いをその紀行文中に書き記すようになるのである。これを菱岡氏は(古学離れ)と称しており、本書所収の「班鳩日記」(天保七年)にもその跡が見られることを指摘している。

また本書には、「ぬさぶくろ日記」草稿本と「熊野日記」(『浜木綿日記』の草稿本)も収められており、日記の完成に向けて苦心した久足の推敲過程を窺うこともできる。

本書を通して久足の紀行文、またその中に見られる彼の詠歌に触れることで、久足の紀行・詠歌の側面をより明確に把握でき、ひいては彼の文化的営為の全容を明らかにすることも可能となるはずである。

(平成二十七年三月 皇學館大学研究開発推進センター神道研究所 A5版 三三八頁)

深沢秋男・伊藤慎吾・入口敦志・
中島次郎・柳沢昌紀 編

『仮名草子集成』第四十九卷

本書は、昭和五十五年より刊行が続く、案内記・評判記・
教訓物・笑話など多様な仮名草子(約二二六編)を原本に忠
実に翻刻し、収録作品の解題を付すシリーズの第四十九巻で
ある(二〇一五年十一月現在、第五十四巻まで刊行)。本書の
構成は以下の通り。

知恵鑑(万治三年板、十巻十冊、絵入)(承前)

巻第六

巻第七

巻第八

巻第九

巻第十

解題

竹斎(寛永整版本、二巻二冊、絵入)

上巻

下巻

解題

寛文板『竹斎』全挿絵(寛文板、四巻四冊、絵入)

解題

竹斎(奈良絵本、一冊、絵入)

解題

長齋記(写本、一冊)

解題

長者教(古活字版、一巻一冊)

解題

長生のみかど物語(元禄八年板、一巻一冊)

解題

第四十八巻『知恵鑑』(巻一〜巻五)正誤

それぞれの作品の翻刻と解題の担い手は、『知恵鑑』柳沢昌
紀、『竹斎』(寛永整版本)入口敦志、『寛文板』『竹斎』全挿
絵・『竹斎』(奈良絵本)中島次郎、『長者教』・『長生のみかど物語』伊藤慎吾である。

(平成二十五年三月 東京堂出版 A5版 三三八頁 一八、〇〇〇円+税)

大高洋司・陳捷 編

『日韓の書誌学と古典籍』

本書は、国文学研究資料館が韓国国立中央図書館の協力の

下で行ってきた、同館所蔵日本古典籍の調査がきっかけとなって実現した書籍である。本書の構成は以下の通り。(第Ⅰ部のコラム・第Ⅱ部の解題作品名は割愛した)

はじめに

日韓書物交流の軌跡

第Ⅰ部 韓国古典籍と日本

日本現存朝鮮本とその研究

韓国古文献の基礎知識

韓国国立中央博物館所蔵活字の意義

高麗大藏経についての新たな見解

日本古典籍における近世初期の表紙の変化について

——朝鮮本と和本を繋ぐもう一つの視座

古活字版の黎明——相反する二つの面

韓国国立中央図書館所蔵琉球『選日通書』について

第Ⅱ部 韓国国立中央図書館所蔵の日本古典籍——善本解題

【国語学】

【和歌（写本・版本）】

【物語】

【中世散文】

【往来物】

【俳諧】

【近世小説】

【説経正本・絵本・草双紙】

【漢文学（日本人漢詩文）】

あとがき

日本の古典籍は積極的に中国、朝鮮半島の書物文化を受け入れながら、独自の特色を形成したものであり、その特質を認識し、理解するためには、中国と朝鮮半島における書物文化との比較が必要不可欠である。しかし、隣国どうしでありながら、従来、日本国内における韓国古典籍書誌学に対する認知度は、中国古典籍を対象とする漢籍書誌学に比べると非常に低く、このことはまた、韓国研究者の日本古典籍に対する理解度も同程度であったことを意味する。

タイトルにある通り、本書では日韓の書誌学・古典籍を扱っているが、全体としては、日韓を「比較」しているわけではない。そうした意味では、ここにも限界があるのだろうが、一方で、本書には次の研究段階へと進むためのヒントが詰まっていることも間違いない。

こうした点で、本書は近い将来における、日中韓、さらにはアジア漢文化圏全体を視野に入れた古典籍の比較研究の実現へとつながる、重要な役割を担っているものと言えよう。

(平成二十七年五月 勉誠出版 A5版 二〇八頁 二、〇〇〇円＋税)